

# *The Cloud of Unknowing* に見る 中世英語ワードペア表現の動機

青木 繁博

## Motives for Word Pairs in *The Cloud of Unknowing*

Shigehiro Aoki

中世英語英文学に多く見られるワードペアが用いられたとき、それをを用いた者にはどのような動機があったのだろうか。何らかの明確な意図あるいは目論みなどがあったのだろうか。

ワードペアの包括的な研究としては、Koskenniemi (1968) や Leisi などがあり、膨大な量のテキストを精査し、多くのワードペアの用例の考察から導き出されたものとして、大いに傾聴に値するものがある。しかしながら、多数の作品や複数のジャンルに渡る研究や、多くの用例に共通して見られる特徴に着目する研究においては、「ワードペアとは」といった問いに対する結論としては、例えば「強調するものである」といった一点に収斂するようである。当然個々の作品にはそれぞれの事情といったものがあり、ワードペアに関しても、各作品において著者がどのような動機に基づいてワードペアを用いたのか、いわば「なぜそのペアが作られたのか」あるいは「なぜその文脈で用いたのか」といった点については更なる研究の余地があると思われる<sup>1</sup>。本論文ではテキスト *The Cloud of Unknowing*<sup>2</sup> (以下 *Cloud*) に見られるいくつかのワードペアの用例を挙げ、それらがテキストの文脈においてどのように用いられているのかを考察することを通じて、ワードペア表現の背景にある動機を探る。

### 1. *bodily and ghostly*

複数の研究において、ワードペアとして用いられる2語の関係で最も多いのは同意語である、といった点が指摘されることが多いようである。しかし同意語でないペアについても、かなりまとまった数の用例が見られることから、そのような例も併せて挙げられる場合がほとんどである。例えば Koskenniemi (1975) では、同意語でないペアの一つとして *complementary* または *antonymous* と呼ばれるワードペアを挙げている (例としては p.214より、“of *body* er of *catel*”、“*bodily* & *ghostly*” など)。これらは反意語的な意味関係を持った2語がペアになったものと言えよう。また、Malkielが現代英語につ

1 Kikuchi (1995) では、作品やジャンルの相違によりワードペアの役割や動機は一概には扱えない点が強調されている (p.3)。

2 テキストはGallacher版による。電子テキストのため、用例の引用の際には、「頁/行」ではなく、通しの「行」番号のみを示している。

いて挙げた “*knife and fork*”、“*hammer and tongs*” (p.115) などのように、同じカテゴリーに属する2つの物を指す語がペアになる例もある。*Cloud*を見ても、antonymousなペアとしては “*bothe good and ival*” (147ほか多数)、“*be wonne and lost*” (348-349) などが、また同一カテゴリーの2語のペアとしては “*thi scheeld and thi spere*” (505)、“*alle the juelles and the relikis of the temple*” (2398-2399) などを例として挙げるができる。

同意語でないペアは、ペアの定義に「同意語であること」を含めているような研究（または同意語のペアに絞って考察する場合）においては、その考察の対象からも外れてしまうものであろう。しかしながら、同意語でないペアのいくつかは、その頻度を考えると、何らかの形でワードペアの考察の中に位置付けることが不可欠であると考えられる。しかし、同意語のペアと同意語でないペアとを含む全てのペアを同じように扱うことができるかと問われれば、現時点では大いに疑問である。反意語のペアや、同じカテゴリーに属する語からなるペアは、同意語のペアとは異なる構成である以上、様々な面で同意語のペアとは相違があると予想される。

動機という観点からは、同意語でないペアには定型句的なフレーズが多いことから、いわば慣用的に用いられたケースが最も多いと推測される。特に現代英語における用例に関しては、おそらく「なぜこの2語がペアなのか」という理由が忘れられている例も多いのではないだろうか。

しかし個別のペアの用例を見ると、一見慣用句的に用いられたように思われるペアの中にも、実際にはそうとは限らない例もある。Koskenniemi (1975)でも挙げられた “*bodily & goostly*” は *Cloud*にも頻繁に見られるペアである。ペアの数は6例と多く、「慣用的に」用いられているという面もない訳ではない。もっとも以下の関連する表現と併せて見た場合、このペアの持つもう一つの面、すなわち表現として活用されている様子が浮かび上がってくる。以下は *bodily* と *ghostly* が *and* だけでなく、*and* 以外の接続詞（または接続方法）によって結び付けられている用例の一覧である（*and* による6例の他、*ne* が4例、*or* が19例）。

bodily and ghostly	755 <i>bodily or goostly</i>
“and”	841 <i>bodily or goostly</i>
221 <i>bodily and goostly</i>	947 <i>bodily or goostly</i>
533 <i>bodily and goostly</i>	949 <i>bodily or goostly</i>
563 <i>bodily and goostly</i>	1330 <i>bodily or goostly</i>
604 <i>bodily and goostly</i>	1331-1332 <i>outher bodily or goostly</i>
950-951 <i>bodily besines and goostly</i>	1463 <i>whether ... bodily or goostly</i>
1759 <i>bodily and goostly</i>	1732 <i>bodily or goostly</i>
“ne”	1743-1744 <i>bodily or goostly</i>
401 <i>neither bodily ne goostly</i>	1828 <i>bodily or goostly</i>
1053-1054 <i>neither bodily thing ne goostly</i>	2013 <i>bodily or goostly</i>
1655 <i>neither bodily thing ne goostly</i>	2266 <i>bodily or goostly</i>
1800 <i>neither bodily worching ne goostly worching</i>	2315 <i>bodily or goostly</i>
“or”	2320-2321 <i>bodily or goostly</i>
429-430 <i>whether ... bodily creatures or goostly</i>	2392 <i>bodily or goostly</i>
582-583 <i>bodily or goostly</i>	2494 <i>bodily or goostly</i>
655 <i>bodily or goostly</i>	

ここに挙げた用例のバリエーションや頻度から考えて、bodily and ghostly は、必ずしも接続詞 and も含めて定まった表現ではないが、これらの2語（またはそれらが表す2つの概念）の結び付きが意識されている点は明らかである。その結び付きが、言語レベルにおいて様々な接続詞を用いた表現として表されたとする解釈が実情に合っていると思われる。これはもちろんテキストの内容および文脈を受けてのことであろうが、ここでは bodily ‘and’ ghostly という形が崩されている事実そのものが重要である。例えば韻文においては、接続詞の部分もリズムなどの面で重要であるため事情は異なるであろう。しかし当該テキストのような散文では、語の関連性は保ちながら形を変えている点からは、ワードペアが表現のために様々に活用される様子を見て取ることができる。

Muellerでは、Caxtonにおける“doublings”を扱った章で、ラテン語での -que 等を用いた、いわば「接続詞によらない」接続方法とは対照的に、“in English and in Germanic languages generally, the syntax of doublings is highly constrained; the conjunctive particle must be positioned between the coordinated elements” (p.150) とし、英語におけるワードペア（またはそれに相当する表現）については接続詞が必須であると述べている。確かに形態の面では、何らかの接続詞によって2語が結び付けられている点がワードペアの定義としては妥当だろう。しかし、bodily and ghostly の例のように、andによるものも or 等によるものも同じように頻出するペアを見ると、確かに接続詞は必須かもしれないのだが、その接続詞が何であるかについては第一義的な重要性がない場合もあることを示唆していると考えられる。すなわち、ペアによっては、最も頻繁に用いられる and も、いわば「繋ぎの言葉を表す記号」であり、あくまで語同士の結び付きにこそワードペアの本質が存在すると言えるのではないだろうか。このように見方を変えると、ワードペアの研究の中には、より抽象的な結び付きを追及していくといった方向性も含まれていると考えられ、その研究の先に、単なる慣用句ではない、生きた表現としてのワードペアの手掛かりがあると予想される。

## 2. men and women または man or woman

men and women	632 any <i>man</i> or <i>womman</i>
“and”	650 any <i>man</i> or <i>womman</i>
640-641 <i>men</i> and <i>wommen</i>	667-668 any <i>man</i> or <i>womman</i>
741 alle the <i>men</i> and <i>wommen</i>	876 a <i>man</i> or a <i>womman</i>
885 <i>men</i> and <i>wommen</i>	878 the whiche <i>man</i> or <i>womman</i>
908 <i>men</i> and <i>wommen</i>	1020 any <i>man</i> or <i>womman</i>
1616 <i>men</i> and <i>wommen</i>	1372 A <i>man</i> or a <i>womman</i>
“or”	1442 a <i>man</i> or a <i>womman</i>
486 what <i>man</i> or <i>womman</i>	1588 A yong <i>man</i> or a <i>womman</i>
489 a <i>man</i> or a <i>womman</i>	1875 iche <i>man</i> or <i>womman</i>
537-538 other <i>men</i> or <i>wommen</i>	1876 the worst favored <i>man</i> or <i>womman</i>

このリストからは、接続詞が and のものは複数形が、逆に or の場合は単数形が多いという使い分けの傾向が見て取れる。ニュアンスとしては and は「総じて」を表すのに対し、or は（“any” や “iche” などの語句が付与されているかどうかに関わらず）「男女問わず」といったところであろうか。

この例の他にも、意味としては全く別のペアだが、単数形・複数形の使い分けが見られる例としては

以下のようなものがある。これらについては *Cloud* における用例数が少ないため、上記 *men and women* または *man or woman* のように「明確に」とまではいかないが、同様の傾向の一部を示すものと位置付けられる。例えば、*saints and angels* の *or* および *ne* の用例については、そのほとんどが否定の文脈であることから、接続詞という要因に加えて、文脈もまた単数形・複数形の使い分けに影響することを示す例と言えよう。また *brothers and sisters* については、*or* の用例あるいは単数形の用例を *Cloud* では見つけることができなかった。これについては（一つの作品中で何らかの傾向が見られない例については）今後複数のテキストをあたり、傾向はどうか確かめる必要があるかもしれない。

*saints and angels*<sup>3</sup>

“and”

280 Alle *seintes* and *aungelles*

722 alle *seintes* and *aungelles*

740-741 alle the *seintes* and *aungelles* in heven

795 alle the *seintes* and *aungelles* in heven

“or/ne”

442-443 ne on the *seintes* or *aungelles* in heven

608 alle the *aungelles* or *seyntes* in heven

629-630 he wil not rest him finaly in the mynde of any *aungel* or *seinte* that is in heven

1264 no *seynte* ne none *aungel*

*brothers and sisters*

881 theire owne *brethren* and theire *sistres*

1109 *brethren* and *sistren*

この項で挙げた用例に見られる、単数形・複数形の使い分けは、一つにはこれらのペアが固定化されていないことを示すものである。2語の組み合わせとしては定まっていることは明らかだが、その運用については、個々の文脈に合った使い分けがなされていると言える。このことは、ワードペアの形態の研究においてもやはり、文脈、意味、内容等を加味する必要がある点を改めて示すものと考えられる。

### 3. sun and moon and stars

ワードペアには同意語からなる組み合わせだけでなく、様々な意味関係を持つ語が組み合わされる点については既に述べた。Koskeniemi (1968) および谷 (2003) においては、ワードペアはその構成要素である語の意味関係によって以下の4種に分類されている<sup>4</sup>。

1. nearly-synonymous 「同義あるいは類義」

2. associated by contiguity of meaning 「換喩、つまり意味の隣接による結びつき」

3 この例については、次項で述べる “enumerative” な表現と関連付けて解釈することができるかもしれない。

4 4つの分類についてはKoskeniemi (1968) のp.90、日本語の用語および説明については谷 (2003) のp.22にある記述による。

3. complementary or antonymous 「相補的または反意」

4. enumerative 「列挙」

この項では、“4. enumerative” 「列挙」とされる、2語よりも多くの語からなる「ペア」（あるいはフレーズ）の例について考察する。もちろん *Cloud* にも多数の用例を見ることができるが、多くの語が並べられた例においては、構成する語句が必ずしも対等に並んでいる訳ではない。加えて、多数の語からなる表現の根底にあるものは一つ概念である、といった場合もある点も示したい。

まず、語句の並び方が対等でないと考えられる例としては、以下のようなものがある。

「太陽、月、星」

2161-2162 the *sonne* and the *mone* and alle the *sterres*

「体内の部位」

1817 in their *backes* and in their *reynes*, and in their *pryvé membres*<sup>5</sup>

「神と聖人と天使」および「神と天使」

603 more plesing to *God* and to alle the *seintes* and *aungelles* in heven

1893-1894 in the sight of *God* and His *aungelles*

1897-1898 in the sight of *God* and the *seyntes* and the *aungelles* in heven

これらの例の解釈としては、もちろん3項目が順に列挙されたものと見ることも可能であろう。しかしそれぞれの語句の表すところを考慮に入れた場合、2項目にさらに1項目が加えられたと見る方が自然な場合もある。上記の例を見る限り、「星々」「体内の諸器官」「聖人」等は、その他の項目と比較して対象とするもの数が多い、あるいは表す範囲が広い、といった印象を受ける。

また、下の2167-2168の例の前半には *mind*、*reason*、*will* の3項目からなる表現が見られる。それらの3語に含まれる *reason* と *will* の2語は、この直後からペアとして頻出する（2176以下）<sup>6</sup>。このように、3語は対等な関係という訳ではなく、*mind*、*reason*、*will* の中でも著者は *reason* と *will* とを重視するようで、この文脈においてはより重要性を持つものと考えている、あるいはより適切に言いたいことを表現できる語句として認識していると考えられる。この用例では、3語の関係の下に隠された2語の關係に着目すべきである。

2167-2168 thees three principal: *minde*, *reson*, and *wille*; and secondary, *ymaginacion* and *sensualité*

*reason* and *will*

2176 *reson* and *wille*

2183-2184 *reson* and *wille*

2187 of *reson* and of *wille*

2190 *reson* and *wille*

5. Footnotes には “1817 *reynes*, *kidneys*, *loins*; *pryvé*, *private*” とある。また周辺には *or* による表現もある。

6. これに先立つテキスト冒頭の目次部分にも1例（186 Of the other two principal mightes, *reson* and *wil*）がある。

enumerative なペアは主として3語以上の語からなる表現（フレーズ）が対象となるが、上のように数ある項目の中から2項目のみを挙げたかのような表現もある点は、「多くの語を並べるつもりで」文中では2語だけにした、といった部分もあるのではないかと推測される。動機という観点からすれば、2語のペアの中にも3語以上の「列挙」のそれに近いものが存在する可能性を示している。この場合、Koskenniemi (1968) の enumerative と、そこで扱うべき用例とでは捉え方に若干の相違が生じることにもなるだろう。用例を分類する際にも違いが出てくると考えられる。ワードペアの4つの分類に関しては今後も再考していくことが望ましいと考えている<sup>7</sup>。

次に、いくつかの語句が並べられて、一つ概念や事物を指す例を挙げる。下記1570-1573の例は非常に多くの語が並べられている箇所である。中には頭韻的なペアも含まれ (*wepith* and *weilith*)、また活用語尾が揃っている点から脚韻的な様相も見せつつ、それでも一通りリストアップされた後で “*schortly to sey*”、「すなわち」と一括りにしてまとめられている感がある。また1036の例は、この部分だけを見ると「意味の隣接による結びつき」を持つ2語のペアにも見えるのだが、これは実は直前にある “*needful things*” の例として挙げられたものである。つまり、他にも数え切れないほど存在するであろう “*needful things*” の中から、これらの2語だけを取り上げ、それによって「必要不可欠なもの」という一つの意味を表していると考えられる。

1570-1573 *insomochel, that he wepith and weilith, strivith, cursith, and banneth, and, schortly to sey, hym thinkith that he berith so hevvy a birthen of hymself that he rechith never what worth of hym, so that God were plesid*  
1036 *mete and clothes*

なお、ペアが全体として一つ概念を表すことがある点に関連して、ペアという形では表現されていないかもしれないが、それでもやはり上記の例のように、ペアやフレーズの背景にある概念や思想といったものが垣間見える例もある。

2144 *Take kepe that I sey upright goostly, and not bodely*  
2182-2183 *and somme principal, as ben alle goostly things, and som secondary, as ben alle bodily things*

前者の例では、ペアとして頻出する2語 *bodily* と *ghostly* が対比させられている（第1の項を参照）。それらの語または概念に結び付きがある点は、当該ペアの頻度から見て明らかだが、後者の例では *bodily* と *ghostly* をより明確に位置付けるような記述があり、より具体的に、「最も主要なものが *ghostly*、それに次ぐものが *bodily*」と述べられている。このような例は、形態としては本論文で扱うワードペアの範疇からは外れるかもしれないが、それでも頻出ペアである *bodily* and *ghostly* を念頭に置いて書かれた表現か、あるいはやはり概念の結び付き（または対比といった捉え方）が先にあり、そのことが時にワードペアとして（ワードペアという形式として）結実するという、ワードペアが形になる過程を思わせる例ではないかと考えている。

7 この項で言及した Koskenniemi (1968) のワードペアの4つの分類について、彼女自身が不明瞭さを認めている点は既に Kikuchi (1995) において指摘されている (p.3, 脚注6)。そこでは、各分類の間には厳密な境界線といったものは存在せず、いくつかのペアについては明確に分類することが困難であることが示されている。なお Koskenniemi (1975) の方では語の意味関係による分類は3種類までで、“enumerative” にあたるものはない。

## 4. 「非難するワードペア」 (proud, curious and imaginative)

Cloudに見られるワードペアのいくつかは（中には決まり文句なども含まれるが）神を称えるために用いられたものがある<sup>8</sup>。下の例はいかにも神を称えるかのような一節である。

257 *the Almighty God, King of kynoges and Lorde of lordes*

これに対し、ワードペアの中には特定の思想や人、組織などを批判する態度が示されたもの、いわば「非難する」ために用いられたと考えられるものがある。例えばこのテキストに見られるような神秘主義的思想においては、場合によっては「理性」や「学識」等が非難の対象にもなり得る。このような考え方に基づいた表現として、以下のように *curiosity* などの語が、*pride*（大罪の一つである点は指摘するまでもない）とペアになる多数の用例が見受けられ、これらの語または概念の捉え方が端的に示されていると考えられる。

394 *by a proude, coryous, and an ymaginatiifwitte*

534-535 *with pride and with coriousté of moche clergie and letterly conning*

539-540 *proude and corious skyles of wordely thinges and fleschely conceites*

1594 *pride and coriousté in hemself*

1603-1604 *of their pride and of their fleschlines and their coriousté of wit*

1867-1868 *tokenes of pride and coryousté of witte and of unordeynde schewyng and covetise of knowyng*

1957 *pride and coriousté of kyndely witte and letterly kunnyng*

*curiosity* のペアの相手としては、*pride* の他には“*fleschelines*”なども用いられている。またこのような表現の中には、394や1603-1604の例に見られるように、3つ以上の項目からなり、まるで「重ねて、強く」非難するかのような態度が示されたと考えられるものもある。

複数の語句を重ねて、強く非難するかのような表現としては、他にも以下のような用例が挙げられる。

268-269 *And kepe thou the windowes and the dore for flies and enemies assailyng*

718 *the filthe, the wrecchidnes, and the frelté of man*

1607-1608 *moche ypocrisie, moche heresy, and moche errour*

1968-1969 *alle soche heretikes, and alle their fautors*

同様のことは、下の「この本を読む者として想定していない人たち、対象としない人たち」について

8 谷 (2002) は、Schaefer (“Twin Collocations in the Early Middle English Lives of the *Katherine Group*.” *Orality and Literacy in Early Middle English*. Ed. Herbert Pilch. Tübingen: G. Narr, 1996. 179-198.) を参照し、「誉める・崇める」といった意味のワードペアについて考察している。

の記述にもあてはまる。ここには多くの語句が連綿と書き連ねられている<sup>9</sup>。

28-29 *Fleschely jangelers, opyn preisers and blamers of hemself or of any other, titthing tellers, rouners and tuitlers of tales, and alle maner of pinchers*

1861-1862 *gigelotes and nice japyng jogelers*

2477-2478 *Fleschly jangelers, glosers and blamers, roukers and rouners, and alle maner of pynchers*

なお文体論的な観点からは、非難するワードペア表現においては、2語を超える数の項目からなる場合や、または複数のペアが連続して用いられるといった構造になる場合が多いようで、結果として複雑な文章、あるいは単純ながらも長い記述になる傾向が見られる。このことはやはり、重ねて否定し、強く非難する態度の表れと言えるのではないだろうか。

この項で挙げた「非難するワードペア」に関して、今後の議論の出発点になると思われるのは、Clark によって指摘されている、“the way of affirmation and the way of denial” (p.277)、つまり肯定と否定の両面によって神を捉えようとする *Cloud* の著者の神学的な姿勢である。この後に Clark は続けて、肯定と否定との両面で神を語りつつも、実際には肯定も否定も超えたところでしか神を捉えることはできないといった *Cloud* の思想について言及している（その思想は、ある程度他の神秘主義者とも通じるものであろう）。*Cloud* における非難するワードペア表現、すなわち悪徳や断罪すべき者など、否定すべきものを表す語句を重ねる用例は、神を捉えるに至る過程の途上にあることを象徴し、自らの思想を表現によって実践しているかのようでもある。

## 5. 1語と複数の語句がペアになる例

670-671 *ben gilty and combrid with any soche synnes*

1059 *alle other thinges put down and *forgeten**

1186 *dyspysid and sette at lytil or nought*

1527 *thou schalt *lothe* and be wery with alle that thing*

1640-1641 *as it were *folily* and lackyng kyndly discrecion*

ここではまず、*Cloud* における1語と複数の語句とが結び付けられた例をいくつかリストアップした<sup>10</sup>、これらの表現の背景にある動機としてはどのようなものが考えられるだろうか。可能性の一つとしては、他のワードペア（1語と1語の対応）と同様の、表現上の要求があると考えられる。すなわち、ある1語に対して同意の語を結び付けようとした場合（つまりペアを作ろうとした場合）、適切な語があればペアになるが、なければ上記のようなフレーズになるといった文章作成上の都合である。それが上記のような例にあてはまるならば、これらの1語と複数の語句が並べられた例も、「純粋な」

9 Shimogasaは、ワードペアに相当するであろう表現（ここでの用語は“binomial expressions”）に関し、“Without these figure of speech, the romance-composers could not have versified, nor could the professional minstrels, jongleurs or story-tellers have recited or chanted” (p.72) と述べている。「非難する」ような内容が、“jongleurs”などの技法と同じ表現方法（ここではワードペア）によって表現されたのだとすれば皮肉なことである。しかしながら、この例はむしろ、ワードペアにはShimogasaの指摘するように韻文や口承文学の形式とも深く関連する面も存在するのは確かだが、加えて形式とは別の要因も働いていることを示すものと考えられる。

10 この項で扱うペアの中には、青木（2008）において同様の視点から考察を加えた例も含まれている。



ワードペアと同じく著者の要求を満たすものであると考えられる。

あるいは、上記の例の中には、丁寧に事物や状況を説明しようとする態度から生じた記述もあるだろう。重要な概念などを伝える際に誤解が生じないように丁寧に説明するものであり、時には「過剰である」とすら感じさせる例もあることは否定できない。こういった用例に見られる過剰さは、その文脈において著者が何に重点を置いているかを示す一例であり、場合によっては著者の内面を映すものとして重要であると考えられる。

また以下の例のように、明確な「意図」を持っていると考えられるワードペアの用例もある。

2376 afermid it by *Scripture* and *doctours wordes*

ここには、聖書の内容と聖職者の言葉は同じであるとする見解に基づき、それを結び付けようとする意図が感じられる。このペアや下記の例などにある「神」「聖書」「教会の教え」などをペアにしている表現については、その成立に関して複数の見方があるように思われる。一方では、著者がこの場で2つの語句を意図的に結び付けたとする見方。他方では、著者が過去のある時点において教えを受けた教化の結果がこのような結び付きとして現われたとする見方である。このことは、意図的なワードペアに関する動機が、文字通り意図的なレベルなのか（教会を讃えるために意図して用いたのか）、それとも無意識的なものなのか（当然の見解を示したにすぎないのか）、その間には曖昧さを伴う場合があることを示唆している。いずれにせよ、こうしたペアは自らの思想の正統性を結果として証明することになる。このような言説は神秘主義的な著者たちによく見られるもので、自らの信仰が正統に属し、自らの行動もまた正当なものであるとの主張に繋がっていると考えられている<sup>11</sup>。

*Cloud* に見られる「意図を持ったペア」の例をさらに挙げるならば、例えば「神」と「人」とをペアにした以下の1907のような表現も、おそらくは意図的に語句を結び付けたペアの一種と言えるのではないだろうか。「人と神、そして聴罪司祭は一つである」と結び付け、また「神と人とが共にある」と改めて示すように用いられたワードペアは、（ある意味で）それらの間の仲立ちをするといった役割を担うものと考えられる。また、教義そのものと教会の教えとを結び付け、両者が常に一致すると語るような165-166および1957-1958の例も、*Cloud* においては印象的なペアの一つである。

1907 bitwix hirn [*him*]<sup>12</sup> and *his God* or *his confessor*

165-166 to the *comoun doctrine* and *counsel of Holi Chirche*

1957-1958 the *comoun doctrine* and the *counsel of Holy Chirche*

なお意図を持ったペアのいくつかの用例からは、1語と複数の語、あるいは複数の語句同士の組み合わせになることが多いといった傾向が見て取れる。同じ語数でペアの相手になる語が見つからない場合でも、あるいは整った「対句」になるような適切な語句が見つからない場合でも、それでも表現したいという欲求（または表現しなければならないという内なる要求）が強いとき、形式面でのアンバランスを超えて、この種の「ペア」が生み出される結果に繋がるのではないだろうか。

11 例えば Julian of Norwich に “by *the grace of god* and *teaching of holie church*” といったフレーズがあるが、Colledge and Walshによると、このような用例は “... enables Julian to stress that these petitions fully accord with traditional and orthodox teaching” とあり (288.40 note)、自らの正統性を訴えるための表現として重要であることが示されている。

12 Gallacher 版では “hirn” だが、Hodgson 版では “him” とある。

## 結論

これまでに挙げた用例がワードペアの全てのタイプではないが、様々な例からは、著者が作品を著す時までには複数の内的要因が存在するという点を示すことができたのではないだろうか。要約すると以下のようなになる。

- 1) 一見慣用句的と思われるワードペアであっても、接続詞を含めて固定化されているのではなく、2語の間にある概念の結び付きが複数の形で表されたと思われる例がある。
- 2) 接続詞の交替や、単数形・複数形の使い分けなど、いくつかのワードペアは様々な活用がなされており、文脈や意味、テキストの内容に沿った用いられ方をしていると考えられる。
- 3) 3語以上が列挙された表現の中にも、2語のペアと同様の表現上の理由によるものがある。2語のペアの語の間にある関係が、3語以上の表現の中に反映されることもある。
- 4) ワードペアの中には、何かを称賛するペアがある一方で、非難するかのように入れられたペアもある。
- 5) 1語と複数の語句とが結び付けられた表現の動機としては、文章作成上の都合もあるだろうが、ペアによってはかなり強い意図が見て取れる場合がある。

この論文で扱わなかった動機に関しては、例えばワードペアと文体との関連性がある。Kikuchi (1986) における考察では、*The Owl and the Nightingale* におけるワードペアの主たる機能は“the language of legal procedure”を模倣するためのものであるといった指摘がなされている (p.33)。*Cloud* とは韻文・散文の違いがあるため、文体に寄与する韻律面の効果といった点では事情は異なるものの、こういった文体的な要求も、ある程度は *Cloud* その他の散文テキストにも共通する、ワードペアの動機の一つであると考えられる。

ワードペアの動機の中には「隠れた動機」もあれば、逆に「強い動機に基づく」といったケースもある。慣用句的な用例に見られる無意識的なものから、自らの立場を明らかにするといった、いわば社会的な理由付けに至るまで、ワードペアの動機には異なるレベルがある点を確認し、それらを系統立てていくことが今後の課題であると考えられる。

## Bibliography

## Texts

Gallacher, Patrick J., ed. *The Cloud of Unknowing*. Originally Published in *The Cloud of Unknowing*, Kalamazoo, Michigan: Medieval Institute Publications, 1997. TEAMS Middle English Texts. <<http://www.lib.rochester.edu/camelot/teams/cloufrm.htm>>.

## References

- Clark, John P. H. "The Cloud of Unknowing." *An Introduction to the Medieval Mystics of Europe: Fourteen Original Essays*. Ed. Paul E. Szarmach. Albany: State University of New York Press, 1984. 273-291.
- Colledge, Edmund O.S.A. and James Walsh S.J., eds. *A Book of Showings to the anchoress Julian of Norwich*. 2 vols. Studies and Texts 35. Toronto: Pontifical Institute of Mediaeval Studies, 1978.
- Hodgson, Phyllis, ed. *The Cloud of Unknowing and the Book of Privy Counselling*. EETS O.S. 218. London: Oxford UP, 1944, revised reprints, 1958, 1973, reprinted 1981.
- Kikuchi, Kiyooki. "Repetition in *The Owl and the Nightingale*." 『英文学研究』(日本英文学会編) English Number 1986年度英文号、昭和61年4月(1986年)、pp.17-38.
- . "Aspects of Repetitive Word Pairs." *POETICA* 42、平成7年4月(1995年)、pp.1-17. (Tokyo: Shubun International Co., Ltd.)
- Koskenniemi, Inna. *Repetitive Word Pairs in Old and Early Middle English Prose*. Turku: Turun Yliopisto, 1968.
- . "On the use of repetitive word pairs and related Patterns in *The Book of Margery Kempe*." *Style and Text: Studies Presented to Nils Erik Enkvist*. Ed. Hakan Ringbom. Stockholm: Sprakforlaget Skriptor AB, 1975. 212-218.
- Leisi, Ernst. *Die tautologischen Wortpaare in Caxton's "Eneydos"*. New York: Hafner, 1947.
- Malkiel, Yakov. "Studies in Irreversible Binomials." *Lingua* 8 (1959) : 113-160.
- Mueller, Janel M. *The Native Tongue and the Word: Developments in English Prose Style 1380-1580*. Chicago: University of Chicago Press, 1984.
- Shimogasa, Tokuji. "Binomial Expressions in *Le Morte Arthur*." *Bulletin of the Faculty of International Studies, Yamaguchi Prefectural University* 3 (1997) : 59-74.
- 谷明信 「*A Thesaurus of Old English* は初期中英語に有用か? - The 'Katherine Group' に現れた Word Pairs の観点から -」 『兵庫教育大学研究紀要』 第22巻 第2分冊、2002年、pp.23-30.
- . 「初期中英語the 'Wooing Group' の Word Pairs の用法とその特徴」 『兵庫教育大学研究紀要』 第23巻 第2分冊、2003年、pp.19-24.
- 青木繁博 「中世英語散文におけるワードペア、フレーズおよび関連表現についての一考察」 『新潟青陵大学短期大学部研究報告』 第38号、2008年、pp.97-109.

